

〈研究ノート〉

近江学園を作った人々から学ぶ福祉の在り方

糸賀一雄・池田太郎・田村一二

石野 美也子

現代を取り巻く多くの福祉の課題は、児童虐待、高齢者虐待、いじめ、児童の貧困など解決すべき問題は多岐にわたる。今後、福祉はどうあるべきかを社会事業から社会福祉に転換をはかり、近江学園を創設した糸賀一雄、池田太郎、田村一二の人間観、福祉観およびその思想形成の過程を振り返ることで考察する。

キーワード：糸賀一雄、池田太郎、田村一二、人間観、思想形成

1. 社会福祉の象徴としての近江学園

滋賀県を、社会福祉の進んだ県として有名にした一つに、滋賀県立近江学園がある。

近江学園は現在は湖南市石部にある知的障害児施設であるが、開設当初は天津市南郷にあった。開設当初は戦災孤児（戦争で親を失った子ども）、生活困窮児（戦争などで親が養育できないなど生活に困っている子ども）、精神薄弱児という知的障害児に変わる前の表現（これからは歴史的なことを考えて当時のことを述べるときは当時使われていた精神薄弱（児）という言葉を使う）が入所する施設であった。

では、なぜ精神薄弱児と戦災孤児や生活困窮児が共に暮らすことになったのか。

日本は昭和20年8月15日に第2次世界大戦で負け、終戦を迎えた。当時の日本にとって戦争に負けたことは大きなショックであり、信じられないことであった。大人も子どもも、その人生を大きく変えるものであった。そして戦争で親を失ったり、様々な理由で親が養育できなくなった子どもが世の中にあふれた。どうして生きていけばいいかわからない不安の中で、お互いに食べ物を分け合ったり、大きい人が小さ

い子どもの世話をしたりと、自然にグループができ、子供たち同士で助け合って暮らす姿が見られた。そのような子供たちをトラックに乗せて、施設へと入所させるということがあった。児童の人権など考えられていなかった時代である。「人権」などという言葉がまだ言われていない時代にあっては子どもを守る手段としては、そのような方法しかなかった。このような様子を見てこれではいけない、何とかしなくてはと思ったのが糸賀一雄である。糸賀一雄は滋賀県庁に勤め、優秀で、戦争中も重要な仕事をしてきたが病気で療養しているときに敗戦を迎える。その糸賀一雄のもとに同じ考えを持った田村一二、池田太郎が訪れ近江学園構想ができたのである。田村一二は昭和19年に滋賀県社会事業主事として実質的に精神薄弱児施設「石山学園」を任されており、池田太郎は昭和18年に軍人遺家族（軍人の人の遺族や家族）のための身体の弱い子どもたちの施設「三津浜学園」の主任となっていた。

このような経緯で近江学園は一部を戦災孤児や生活困窮児、二部を精神薄弱児と二部制にして障害の有無に関係なく、共に暮らす施設と

なったのである。そのことが、やがて近江学園の教育の考え方に大きな影響を与えた。

近江学園の実践は近江学園をはじめとしここで解決できないときは、必要に応じて多くの施設を生み出した。

一麦寮（現・一麦）、もみじ・あざみ寮（現・もみじ・あざみ）、落穂寮、信楽学園、びわこ学園、千葉県の日向弘済学園などがある。これらの施設はその時々社会に「これでいいのか」という疑問を投げかけるものでもあった。

このように近江学園は現在のように知的障害児施設としてのリーダー的存在としてだけでなく、日本の戦後における社会事業から社会福祉へと移り変わる時代の象徴でもあり、また、そこから生まれた多くの施設や職員の人々が日本の障害者福祉を支え大きく変えていったといえる。

現在は、社会福祉という言葉はあたりまえのように使われているが、この言葉が使われたのは、昭和20年に日本が終戦を迎えて、人権が認められるようになってからである。

その一つの象徴が近江学園である。初代園長、糸賀一雄は「社会事業からの決別」という表現で新しい時代への希望と期待を込め、今まで社会事業の中で行われていた施設の在り方を社会事業とは離れて、社会福祉という考え方に求めた。

社会事業は長い間、制度のなかった時代に個人が自分の私財（自分のお金やそれに代わるもの）をすべてそそいで、困っている人々を支えてきた。その「人を思う心」は大切に残し、今までのように個人やそれを支える人々の善意ではなく、何かで困っている人々を社会で支えていくように法律を作り、そのように、すべての人々が社会の中で生きていくことこそが大切なのだという考え方が、社会福祉の考え方である。

近江学園は、戦後に初めてできた児童施設として「人権」を大切に、特に子どもたちが社会の中で育っていくことを願い、実践してきた施設である。

2. 三人の出会い

今まで述べてきた糸賀一雄、池田太郎、田村一二はともに深い絆で結ばれていたといえる。三人の出会いを考えると、人の人生において出会いはいかに大切かということとともに、人の一生だけではなく、歴史を変えることがあるのだと考えさせられる。

糸賀一雄が京都大学の哲学科を卒業し、京都で代用教員をしていた時、隣に座り、家も隣同士になったのが、先輩の教師であった池田太郎である。池田太郎は師範学校を卒業し、のちに、児童心理学を学んだ人で、とても静かな人であったが、教育のこととなると、とても熱く語り、その姿を糸賀一雄は尊敬し、何事も話すことのできる、学びあえる友人となる。その関係は、糸賀一雄が戦地に赴き体をこわして戻って、滋賀県に勤めるようになっても続き、ある時、池田太郎は糸賀一雄に田村一二を紹介する。田村一二は京都の滋野小学校の特別学級（現・支援学級）の先生をしていた。田村は、その人たちの教育には常に生活を共にすることが必要と考えていた。しかし、京都ではなかなかそのような教育をする機会を与えられず、池田太郎に相談し、糸賀一雄を紹介される。糸賀一雄はその田村一二の人柄と教育に対する熱意にうたれ、滋賀県の石山学園に田村一二を主任として推薦する。

昭和18年に軍人の遺族や家族の子弟のために滋賀県に作られた「三津浜学園」に池田太郎を主任として迎えた。こうして3人は、それぞれの仕事で滋賀県に集まり、このように近江学園

の基礎が3人の出会いによってできたといえる。

池田太郎は糸賀一雄に出会わなければ三津浜学園にはいかなかったと思うと述べている。また糸賀一雄も田村一二と出会わなければ近江学園はなかっただろうとのちに述べている。このように出会った3人はそののち、立場が変わり、考え方が少しずつ変わっても生涯、それぞれを尊敬し、支えあい知的障害者のための実践に力を尽くした。

3. 近江学園をつくった人々

次に、近江学園を作った糸賀一雄、池田太郎、田村一二の3人が戦後間もない日本で子どもたちのために、何を求めて福祉を実践してきたか、現代に何を残したのかをその実践や書物から考えていきたい。

(1) 糸賀一雄 (1914～1968)

糸賀一雄は大正3年(1914)、鳥取県に生まれ、旧制高校を卒業後、京都大学哲学科を卒業し、京都市第2衣笠小学校の代用教員を経て、軍人として戦地に行くが、病気になり、帰ってきてから滋賀県庁に入庁する。その後、戦後の混乱期に滋賀県立近江学園を創設し、初代園長となり1968年9月17日滋賀県の児童福祉施設等に新しくつとめる保育士に対し研修会を行っている途中に倒れ、次の日に54歳で亡くなる。

近江学園を作ってわずか22年の間に、糸賀一雄が行ったことは数えきれない。たとえば、その時々に必要な施設の創設をはじめとして政策面においても委員となり、児童福祉法制定や精神薄弱者福祉法の制定、重症心身障害児に対する法的整備などに尽力したのである。

糸賀一雄の福祉実践は《実践の中に哲学がある》といわれ、人とは何かを中心に据えて考えた実践だったと言える。このように糸賀一雄の

実践の根底にある思想は池田太郎、田村一二との出会いをはじめ人々との出会いが糸賀思想を生み出し、近江学園の創設とその後の日本の障害者福祉に大きな影響を与えた。

次に、近江学園を創設して22年間の間に糸賀一雄が行った実践を見ていきたい。

《近江学園の3条件》

近江学園には開設当初から守ってきた3つの条件がある。それが近江学園の3条件といわれるものである。

① 四六時中勤務

これは開設当時は文字通り24時間勤務を表していた。現在は24時間ということを表すのではなく、常に利用者の人々に心を向けるという意味で引き継がれている。

② 耐乏生活

これは、戦後間もなくで誰もが貧しかった時代に、貧しさに耐えるということだけを意味するのではなく、寄付などに頼ると安定した生活を保障できないので、独立する力をつけることこそが大切だという考えである。

③ 不断の研究

これは、絶え間なく研究するということの意味している。実践を繰り返し、研究を続けていくことで、その成果を実践に生かしていくことである。このために研究部や医務部を置いた。これも近江学園の大きな特色といえる。

早期発見早期療育を目指した天津市の乳幼児健診や発達保障の考え方もここから生まれた。

《二部制が生んだ教育の成果》

これまでに述べてきたように近江学園は開設

した当時、一部を戦災孤児や生活困窮児、二部を精神薄弱児というようにともに学べるころはともに学ぶという形をとってきた。

農業、畜産、木工などはそれぞれの部が特色を出しあって手をつないできたが、その成果を示す一つのエピソードがある。修学旅行を目の前にして重度の人は一緒に連れて行くのは無理なので別々に計画していたところ、一部の子どもたちから二部も一緒に修学旅行に行きたいという申し出があった。いつも一緒に手をつなぐように言われているのになぜ、修学旅行だけ分けるのかと言って一人の生徒が「自分が責任を持つ」というのを聞いて職員は大変感動し、旅行計画を一部の学生に任せた。何回も自発的に例会を持ち、二部の生徒をどうしたら伊勢まで連れて行けるかを考えた。その中に、研ちゃんという脳性まひの後遺症で、両足がひどく不自由な生徒がいて、とてもみんなと一緒にいけないと思っていたところ、生徒たちは何としても一緒に連れて行くと言って、対策を工夫した。みんなで作った手押し車を用意し、二部の生徒の世話役を決め、おみやげを買うのを付き添ったり電車の中では危なくないようにと気を配ったりして、伊勢神宮の参拝の日を迎え、参拝では「天皇陛下でも車から降りられるのだから降りなさい」と言われ手押し車から降りるように言われると「おじさん、この子のは車じゃないんです。足なんです。だからどうか許してやってください。」¹⁾と言って了解を得て、内宮の奥まで手押し車で行くことができ、無事に修学旅行は終わった。このエピソードはともに学んできたことから、一人ひとりを障害児と見るのではなく、ひとりの友達として、何が不自由であるか、どのような支援が必要かを考えたからこそ実現した修学旅行といえる。これは現在でいうインテグレーションにあたる。

《糸賀一雄が残した言葉》

糸賀一雄は多くの言葉を残しているが、ここではその代表的な2つの言葉を紹介したいと思う。

① 「この子らを世の光に」

「この子らに世の光を」ということが当たり前の時代に、糸賀一雄は「この子らを世の光に」と社会に訴えた。この子らに世の光を当ててくださいという憐みや同情を求めたのではなく、人は誰でも磨けばひかる存在であり、重症の障害を持ったこの子たちが光り輝いて生きていくことのできる社会こそが誰にとっても幸せな社会であるというノーマライゼーションの考え方の先駆けといえる。「を」と「に」の転換は社会の考え方の転換を求めたものでもあるといえる。これは糸賀一雄の最後の講演でも力強く述べられ文字通り、ラスト・メッセージと言われるものである。

② 「人が人と生まれて人間となる」

糸賀一雄が力を入れて伝えたかった一つに「人間関係」がある。「人が人と生まれて人間となる」という言葉はどのような意味を持つのか。私たちは個体としての「人」として生まれ、そして「人間」になっていくのである。「人間」になるという意味を糸賀一雄が説明している文章で紹介する。

「人間は人と生まれて人間となる。それは社会的な存在であるとういいますけれども、その社会的な存在になっていく道行きというものを私たちは問題にしなければいけない。これを教育というのです。人間というのは人と人の間柄と書くんです。人間というのは人の間と書く。単なる個体ではありません。－略－よく私たちは人間、人間といいますが、それは社会的

存在であるということの意味しておる。関係的存在であるということの意味しておる。関係的存在こそが人間の存在の根拠なんだということ、間柄を持っているということに人間の存在の理由があるんだということです。」²⁾

私たちは、だれもが社会的な存在であり、人との関係の中で成長するということの意味している。そこには障害の有無など関係なく、人は人との関係の中で、つらいこと、悲しいこと、うれしいこと、励まされること、を経験し、少しずつ社会的な存在となっていく。それは知的障害の有無には関係なくすべての人の成長の段階をあらわした言葉である。

「この子らを世の光に」も「人は人と生まれて人間となる」という言葉も糸賀一雄が知的障害のある人たちと出会い、その人たちと向き合って「人とは何か」「生きるとはどういうことか」という問いに答えを出した、時代を超え、今も生き続けるメッセージである。

(2) 池田太郎 (1908年～1987年)

池田太郎は明治41年(1908)に福岡県に生まれ、京都師範学校(現・京都教育大学)を卒業後、京都市立衣笠小学校に勤務、短期現役兵として入隊したのち、京都市立衣笠小学校に復帰し、その後、1年間児童心理学を学び、京都市立第2衣笠小学校に赴任し、糸賀一雄と出会う。昭和18年(1943)滋賀県庁に赴任していた糸賀一雄の誘いで、軍人の遺族や家族の体の弱い子どものために作られた「三津浜学園」に主任として赴任した。その後、昭和20年(1945)に終戦で三津浜学園も閉園を余儀なくされ、糸賀一雄、田村一二とともに昭和21年(1946)に近江学園の創設メンバーとなる。

昭和27年7月に生死を共にしようと誓った近

江学園を離れ信楽学園の園長となる。その後、信楽青年寮、民間ホーム、グループホームと信楽の地域で自立に向けた取り組みを一生を通して行った。その中で「劣組」との出会いと信楽学園での取り組みを中心に見ていく。

《教師への目覚め―「劣組」との出会い》

池田太郎の著書『私の歩んだ道から』³⁾という中で教育者として目覚めていく段階が書かれている。池田太郎の一生を見ていくとき、「教育者」という言葉がぴったりくるのだが、最初は、青年期から夢であった畜産の道をあきらめきれずに高校卒業の年の3月に乳牛の世話をする牧夫として無給ではあるけれど住み込みの仕事を見つける。しかし、父が体調を崩し母の願いで師範学校へと進む。

卒業後、教師になって京都市立衣笠小学校で「劣組」を受け持つことになる。もう一つのクラスは「優組」で「劣組」の生徒は「しっかり勉強するように」といっても「私ら劣ちゃんやから」という答えが返ってくる中で池田はなぜ「優組」と「劣組」に分けたのかと不思議に思った。「優組」は「劣組」にならないように「劣組」は「優組」に行けるようにという積極性を養うためにつけられたかもしれないけれど、それでは「劣組」はものすごく自嘲する人間になると池田は感じた。それでも先に述べたように、教師は池田太郎のやりたい仕事と思えないまま、現役短期兵として5か月間、歩兵連隊に入隊した。池田太郎自身は生徒との別れがさびしいなど感じることなく、離れて少しほっとしていた時に生徒全員から手紙が来る。小学校5年生になっても、何を書いているか分からないような手紙であったけれど、つないでみると「先生、兵隊から帰ったらまた私たちの先生になってください。」というお願いの手紙であった。なぜ、そ

んなに思ってくれるのか、それは少し気が楽になったと思っていた池田にとってショックな出来事であった。また、その後、親の代表が面会に来て子どもたちは先生と別れてやけになっているので戻ってきたら、また子どもたちをお願いしますと言われ、ほっとした自分にこんなにまで言ってくれるのかと考えると、その夜、池田太郎は子どもたちの住む方角のともしびを見て、涙が止まらなく、戻ったらしっかり教育と子どもたちに向き合おうということを誓ったという。自分は教師に向いていないと思っていた赴任当時から「劣組」と「優組」に分けられていることに疑問を感じ「劣組」の子供たちに知らず知らずに心を寄せていた。その姿に子どもはひかれていったのではないか。その意味では池田はもともと、わけ隔てのない考え方の持ち主であったといえる。しかし、子どもたちからの思いを受け止め、誓ったこの時が、本当の意味での、教育者、池田太郎の出発点といえる。軍隊から戻った池田は約束どおり「劣組」の教師に戻り、児童心理学を学び、教師として一身に進んでいった。

池田太郎は著書『私の歩んだ道から』という中で「人間を『あの人はええ人や』とか『あんなやつはあかん』とか簡単に決めつけるのは恐ろしいことだと思います。私がどんな人も尊厳存在だと思うようになった原動力はこの『劣組』の人に育てられた」⁴⁾ というように、この出会いは、その後の池田太郎の情熱を持った福祉実践につながっていく始まりでもあった。

《三津浜学園から近江学園へ》

池田太郎の初めての福祉実践は、糸賀一雄に招かれて滋賀県の軍人援護会（出征兵士の遺族や家族の援護を行った組織）によって作られた、軍人の遺族や家族の体の弱い子どものために作

られた「三津浜学園」である。そのとき、池田太郎は京都で教育と心理に力を入れていたときだったのであるが、すべてを捨てて、三津浜学園に主任として赴任した。

池田はこの時の三津浜学園での教育を一生忘れない思い出として、医師であり園長の藤堂参伍との出会いはじめとして、自由に教育ができ、生きがいを覚えたと述べている。その三津浜学園も戦後、間もなく軍人援護会も解散し閉園しなければならなくなり、その後、糸賀一雄、田村一二とともに近江学園を設立する。教師に戻る話もあったが、塾教育のような共に暮らす経験を忘れられず、近江学園の創設にかかわったのだった。近江学園では二部制の生徒たちの育ちなどを経験し、年長になった人たちをどうすればいいかという構想を2年ほど経て昭和27年（1952）滋賀県立信楽寮（現・信楽学園）が創設され、園長として赴任することになった。

《信楽学園と汽車土瓶》

池田太郎は昭和27年（1952）近江学園から20名の子どもたちを連れて信楽にやってきた。当初、近江学園の20名の予定が身体障害者の人たちと一緒に生活することになり、信楽学園となって知的障害者の施設として独立したのは昭和35年（1960）のことであった。また、信楽では当初、歓迎されずに反対の署名まであり、今まで教育を中心にしてきた池田の肩に多くのことがのしかかる。開園の次の年に、信楽でも経験したことのない台風で大水がでて、道路の復旧作業に信楽寮の20名がボランティアとして参加し、その、かげひなたのない働きぶりに、地元の人々の心は和いでいった。また、演劇を通し溶け込んでいった。そのかげには、雨の日にも雨合羽を着て、雨蛙と言われても、来る日も来る日も地元慣れようとし、職員を励まし続け

た池田太郎の姿があった。そのかいもあって、寮生の作る汽車土瓶も地元を受け入れられ月に2万個から3万個作って送り出した。その時の様子を池田太郎は、『ふれる・しみいる・わびる教育』の中で「ある生徒は『僕の汽車土瓶が行く』』と言って指さしています。ある生徒は走りだしトラックを後から追いかけて走ります。一略一何とかして社会の役に立ち社会の一員としての思いに包まれたい欲求を強く持っていたかをまざまざ知らされました。」⁵⁾と述べている。生産と地域が一体となる取り組みは当時の日本では先駆的取り組みであった。その後も20歳を超えた人のための信楽青年寮、さらに地域の家庭から作業に出かける民間下宿、グループホームなど次々に、法律に制定されるより前に実践を行うことを通して、知的障害者の人々が信楽の地で生きていくことができるように、また全国に信楽のような地域が増えて、知的障害者の人々が生きがいを持って生きていくことができることを願った一生といえる。

(3) 田村一二 (1909年～1995年)

田村一二は明治42年(1909)に舞鶴市に生まれ、京都師範学校(現・京都教育大学)図画専攻科を卒業後、京都市滋野小学校で特別教育の担任となり、知的障害児との出会いを経て、滋賀県の知的障害者施設石山学園の主任となり、戦後、糸賀一雄、池田太郎とともに近江学園の創立メンバーとなった。そののち、近江学園からうまれた一麦寮の施設長となり、退職したのちは茗荷村の建設に力を注いだ。ここでは、田村一二の著書の中から、その実践と田村一二が残した言葉を通してみていく。

《代用教員時代一人のために汗の流せる人》

田村一二は青年時代に実家が倒産して、それ

までの生活とは変わり貧しい生活となるが、その頃、京都市教員養成所というのがあると担任の先生から教えられ、京都市内の伯父の家から通うことになった。昼は代用教員として教員の資格を取るというものだった。

その頃の出来事の一つに、次のようなエピソードがある。洋服はまだ高く、和服着用願を出してはかま姿で通っていた田村一二に、ガキ大将が「洋服も着られんやつが何が先生じゃ」とからかうと田村一二は、みんなを校庭に集めて、「君らの中には貧乏なものもいるだろう。僕も貧乏だ。だから、まだ洋服が買えない。しかし、りっぱな服を着ていても、心がりっぱでない人もいるかもしれない。逆に、貧しい服を着ていてもこころのりっぱな人もいるかもしれない。りっぱな人というのは、人のために汗の流せる人のことだ。僕は今貧乏だ。だから君が笑ったような貧しい着物を着、袴をはいている。しかし、心の中ではりっぱな人になりたいと思っている。服装だけで人を見るのは危ない。君らも、着ているものは貧しくても心は人のために汗を流すりっぱな人になってくれよ。」⁶⁾この場面は、生徒に田村の気持ちが通じた、こころのつながった瞬間だったといえる。また、この考え方はその後もぶれることなく「汗を流して働く」ということは田村一二が知的障害者の人たちの教育の中心にすえた考え方である。その教育の芽はこの代用教員時代にすでに芽生えていた。

《滋野小学校時代一差はあって別なし》

昭和8年4月、京都師範学校図画工作専攻を卒業して、滋野小学校に赴任する。滋野小学校は京都でも指折りの優秀な学校で第2部学級と聞いたときは優秀児のクラスの担任とばかり思っていると、特別学級とわかって校長先生に掛け合ったほどがっかりした。はじめは嫌で

しょうがなかったけれど、鼻が出ている子の鼻をふいたり、真剣に叱ったりとかかわりながらも2年間たてば転出するんだという思いを持っていた田村が11年間も特別学級にかかわり続けるように気持ちを変えたのは、その時担任した15人の子どもたちであった。その中でも田村の心を揺さぶった次のようなエピソードがある。

ある時、田村一二が風邪をひいて寝ていると、源三という教え子が見舞いに来て、にたと笑ってから顔を近づけて、田村一二はいつものように、こんな時に笑うな、などというが、彼は冬蜜柑を枕もとに置いて帰って行く。田村一二はその時のことを『賢者モ来タリテ遊ブベシ』の中で、次のように述べている。「おそらく誰かにもらったものであろう。田村先生の見舞いに持って行ってやろうと思ってポケットに入れたまま忘れてしまっていた。それをふと思いで出して持ってきてくれたのに違いない。あの子にしては蜜柑はめずらしい。さぞや食べたかったであろう。その蜜柑を見舞いに持ってきてくれた。鼻の下の鼻汁を指でこすりながら階段を下りているであろう。源三をぎゅうっと抱きしめてやりたいと思った。いやそれよりも「こら源」と言って一発げんこつをお見舞いしてやりたい。」⁷⁾と感動し、代用教員時代に人は外見で決めてはいけないといったことが、冬蜜柑1個で骨身にしみたと述べている。⁷⁾これが田村一二がこの子どもたちとやっていこうと心に決めた大きな出来事であった。誰もが存在としては、等しい価値があり、福祉とは上下の別なくそれぞれが水平線上にあって「差あって別なし」という福祉観を持ったのもこの時期である。田村一二が50年、知的障害児・者教育にかかわる原点がここにある。

《石山学園—開墾にみる育ち》

田村一二は、滋野小学校の特別学級での約11年間の生徒との触れ合いの中で、この人たちとの真の教育は生活を共にすることではないかと考え始めていた。しかし、京都ではその場が用意されず、その時、池田太郎の紹介で糸賀一雄に出会い、滋賀県にその場を用意されることになった。それが石山寺の南にある湘南学園の一角を借りることから始まった石山学園である。そのことを糸賀一雄が田村一二に告げると「行きます」と即答したことに驚き「家族に相談しなくていいのか」という問いに「大丈夫です」と答え、その様子が著書『開墾』⁸⁾に両親は「息子の夢がかなう」と賛成し、妻もニコニコ笑ってうなずき、子どもはまだ見ぬ場所に思いをはせるという場面がある。このように家族の力を得て昭和19年(1944)石山学園へと向かった。着いてみると石山学園は薄でいっばいに埋め尽くされていた。まず、開墾することから始めて15名の園児の食糧を作ろうと考えた。お米の配給では15名の園児は養えず、京都に「托鉢」と称して京都まで自転車で行き、友人や親せきに支援を求めた。開墾は15名の中に精神科の医師とともに、リーダーになれる数名を選び班長へと訓練し、園児同士の育ちを目指した。その思いは見事に的中し、最初は枝1本運ぶさえ危うい重度の園児に対して、班長になった園児はイライラし、厳しい言葉を投げかけ、言われた園児はしょんぼりしてしまうということを繰り返す中で、班長が1本を一生懸命運ぶ園児に対して「頑張ってるな」という声をかけるようになる。開墾について『賢者モ来タリテ遊ブベシ』の中で石山学園の3年間で自分と園児が学んだこととして「まず第1に挙げられるのは『結果』から『過程』価値判断の移行である。つまり、『どれだけのことをしたか』ではなく『どれだけが

んばったか』に価値をおくこと』⁹⁾と述べている。この園児の育ちあいは、滋野小学校で多くを得た田村一二だからこそできたことといえる。また、石山学園での3年間で強くなったというように、田村はこの開墾が教育観、人間観、人生観について計りしれぬものを与えてくれたと述べている。その意味で石山学園での取り組みは、田村一二の考え方に大きな影響を与えた3年間ということができる。

《近江学園から一麦寮へ》

昭和20年(1945)に敗戦を迎え、田村一二は池田太郎と今後の施設の在り方を考え、糸賀一雄に相談し、その後も3人で様々に考え近江学園を設立した。その中でも3条件の中に四六時中勤務を取り入れたのは、生活を共にすることで精神薄弱児・者の教育が成り立つと考えていた田村の影響が強い。近江学園のことを「賢者モ来タリテ遊ブベシ』の中で混在の律というタイトルをつけて次のように述べている。「人間としては何の別はないという水平感を理屈ではなくて、一種の生活感覚のようなもので掴むのではなかろうか。これが差を認めながらの安定感で『混在共存』の本当の姿であろう。」¹⁰⁾とあるように、近江学園を田村一二は年齢や障害を越えた人と人、人と自然、の混ざり合った良さを持った場所と考えていた。その近江学園の中でも、18歳を超えて施設には残れず、しかし、社会で自立して暮らせない人が増えてきた。そのような成人のための施設として、昭和36年(1961)に一麦寮ができ、田村一二は寮長として就任し、近江学園から30人の寮生が一麦寮へ移った。一麦寮では石山学園の開墾、近江学園の山仕事から得た、汗を流して共に働く中で生まれる感情と、石山学園で得た価値判断の基準を「結果」から「過程」に移行することを大切

にしたのである。そのために山での仕事や開墾のない一麦寮では、工事の後にわざと運動場だけは整地しないように頼んでおいて、職員と寮生が一緒になって働く場面を作るようにした。このことが、相互理解と相手への思いやりを生むことを2つの施設の経験を通して知っていた田村一二の教育方針でもあった。

こののち田村一二は『茗荷村見聞記』¹¹⁾を著し、その中では障害を持つ人も、持たない人も、子どもも高齢者も一緒に暮らす、架空の村を描いたが、それを若い人たちの思いもあって現実のものになったのが大萩茗荷村である。それをユートピアと称した記者の人はひどく叱られたというように、田村一二が茗荷村に求めているものは、社会がすべてノーマライゼーションの思想を現実に行き届ける日までの姿ではないか。

一麦寮でわざと運動場を整地させたように「茗荷村だけに任せていいのか」という田村一二の問いではないかと思われる。みんなが平等にもっているたった一つのは「命」だといった田村一二にとってお互いの命を輝かせて生きていける社会の実現こそが茗荷村から発信したかったことだと考えられる。

4. まとめ

ここに見てきた滋賀の福祉を作ってきた糸賀、池田、田村が命がけで社会に伝えたかったことはどのようなことだろうか。戦争が生んださまざまな苦しみの中から、生み出されたそれぞれの思想と生き方を考えたとき、特別なことではなく私たちにできることがあるのではないだろうか。田村一二は「愛とは相手の立場に立つこと」と言った糸賀一雄の言葉を大切にしていた。ささやかな行いが積み重なったとき、三人の望んだ一人ひとりが命を輝かせて生きることができる社会になるのではないか。これらの

思想は古いものではなく、今、我々が直面する児童の虐待や高齢者虐待、いじめなど相手のことを考えない行動が人を傷つけているという当たり前のことを考えられる教育と、周囲の人に無関心にならない、命を大切にすることにそれぞれが向き合う社会の在り方を大切にすることではないか。そのためには、三人の実践を今一度振り返り、これからの生かすことが重要である。

注・引用文献

- 1) 糸賀一雄 『この子らを世の光に』1965、p160NHK出版
- 2) 糸賀一雄 『愛と共感の教育』1972、p.32 柏樹社
- 3) 池田太郎 『池田太郎著作集第4巻』1997. 文理閣池田太郎が自分が福祉へと邁進したことが書かれているのが第4部の「私の歩んだ道から」に詳しく述べられている。
- 4) 池田太郎 『池田太郎著作集第4巻』1997. P.305 文理閣
- 5) 池田太郎 『ふれる・しみる・詫びる教育』1969. pp.65-66 野島出版
- 6) 池田太郎 『賢者も来タリテ遊ブベシ』1984、pp54-55、NHK ブックス
- 7) 田村一二 『賢者も来タリテ遊ブベシ』1984、p.71 NHK ブックス
- 8) 田村一二 『賢者も来タリテ遊ブベシ』1984p.72 NHK ブックス
- 9) 田村一二 『賢者も来タリテ遊ブベシ』1984、p.92 NHK ブックス
- 10) 田村一二 『賢者も来タリテ遊ブベシ』 1984. p113 NHK ブックス
- 11) 田村一二 『茗荷村見聞記』1971. 北大路書房